

書評

鵜田 惠吉 著

「佐藤信淵」讀後感

大泉 行雄

佐藤信淵のすぐれたる業績とその隠れなき聲名は傳へられて久しい歲月を経てゐる。然し今日人々が再びこの偉大なる學者について思ひを新らたにし、新らしい照明の下に改めて見直さうとするのは何故であるか。それはこの吾が國有數の學者が徳川幕府の後期文化・文政・天保・弘化といふ時代に生存して思索し體系づけた業績が今日の統制經濟時代において極めて深い意味をもち、示唆を與ふるところ少なからぬものがあるからである。

佐藤信淵の學問は著しく宏大深奥であり、而もそれ

「佐藤信淵」讀後感

は家系五代に渡つて連綿として發展推敲せられ、信淵に至り集大成せられたと觀られる。彼は醫を一面業としつゝも政治について、農政について、兵學・經濟・國防・社會政策等殆どあらゆる問題について常人の及び難い深い研究と思索とをもつてゐた。傳へられるところによれば「信淵の著書は三百部八十卷あつた。」(四頁)といはれるが、ただこの一事を以てしてもその超人的な一面を伺ひ知るのである。さうしてこれを分類すれば「天文・農政・農學―測量・氣候・土壤・耕種・培養・樹藝・水利・田畵―物産―山物・鑛産・水産・産産―經濟―垂統・通移・關隘・權貨―兵學―

(四〇五)一〇五

國防・砲術・造兵・造船—教化・刑法・醫學・歴史・地理等々、凡そ二十餘の部門に細別せられる。(四—五頁)。われわれはその學問の宏大にして網羅的なることに先づ驚歎せねばならない。

二

鴉田惠吉氏の勞作「佐藤信淵」は菊版四百十數頁に渡る大作であり、この偉大なる學者に對する敬慕と傾倒からほどばしる情熱を以て物されたる力作である。

この一卷は佐藤信淵に關する精細なる評傳であり、信淵の學問・思想・生活態度及びその時代を説いて委曲をつくしてゐる。

著者は此の四百十數頁に盛るに先づ信淵の人物と學問の一般的な性格を概観する。こゝでわれわれは徳川末期の學者佐藤信淵について何故に昭和の今日、さうしてことに聖戰の只中において格別の意義が見出されなければならぬかを明に理解するのである。「彼が今より百餘年前に示唆せし所の其の豫見は、明治維新以

來着々實現し、殊に今次興亞の聖戰勃發以來、彼の學説は再檢討せられ、今や彼は世紀の脚光を浴び、時代の寵兒として世の絶讃を博しつゝある。」(三頁)

思ふに世に卓越したる思想家或は經世家がその根本的な問題として深い思索をめぐらすものは、殆ど恒にある共通なる課題ではなからうか。人間生活の根底につき、或は人間社會の基底につき、眞實に問題を追求してゆくとき、如何なる時代においても基本的・根本的問題をなすものは共通なるものなのである。

古代の聖賢・碩學が人生について、社會について、或は國家について藝術について思索し工夫した根本問題はひとりその時代のみならず如何なる時代にも共通する問題である。それは同時に今日の問題であると共に、永久に人間と共に在る問題なのである。

問題はこのやうにして常に古い。その古い問題が時代と時勢の情況變化に應じて新しい事態の下に、新しい照明をうけて立ち現はれているところに問題の

新らしさが存在する。かうして問題は常に古くして又新らしいと言はれねばならない。偉大なる思想家偉大なる藝術家或は偉大なる宗教家すべて人間の生活について大いなる業績をのこした人々は、要するにこの永遠に古く且つ新しい人生の問題を直観し、さうしてそれに對して最も根本的な凝視をした人々に外ならぬのである。

佐藤信淵の場合も亦同様である。彼の生存した徳川末期はわが國の封建時代に外ならぬ。然しこの時代に在つて彼が直視し思索し研究した問題は、決して問題の外相ではなくて問題の深奥に達するものであつた。さればこそ今日の時代において彼の業績が改めて反省せらるべき理由をもつといはれるのである。

三

鴉田氏のこの快著は如何なる讀者をも魅了すべき怖るべき力をもつと共に、讀むものをして事毎に反省をうながす迫力をもつ。わたくしはこれを手にして巻を

おく能はず、しかも只一氣に讀み通すことも出来なかつた。なぜであるか。

著者の雄渾にして壯重なる文章は、よむ者をして時間を忘れて没入させるのである。それはひとり著者の文才たるにとゞまらず、思ふに著者その人の信淵に對する情熱でありまた國を思ふの至情に發するものであらう。

だが同時に、人々はその盛られたる行文の間に一々今日のわれわれ自身が生活する時代と情勢を反省することを促される。これが只一氣に讀了し得ない所以である。著者は信淵を説くと共に現代日本から目をはなさず、常に我々の足下に注目する。

若しわたくしが著者の取上げた諸項目について、一々その梗概を示し、さうして一々のわたくしの感銘をのべていつたならば、おそらくわたくしも亦著者と共に四百頁の大冊を作らねばならぬであらう。與へられたる短い評の紙幅を以てしては到抵これをよくする

ところではない。わたくしは不本意ながら、僅かに著者の取上げたる信淵についての諸問題を指示するだけにとどめて、讀者自らこの書について味讀されんことを庶ふより外ないのである。

信淵の人間と學問の概観に次いで、彼の家學が説かれる。父子五代に渡つての佐藤家の學問が如何にして構成されるに至つたかは極めて興味ふかき問題である。

次で信淵の著作、その特異性、信淵研究の歴史とその種々相が説かれる。信淵をめぐる父及び母の影響、その遊歴・醫人としての信淵・經世家としてまた兵學家としての信淵が順次に取上げられる。

信淵の私的生活と共に哲學・經濟・國防・社會政策・農政等の信淵の學問一般についての考察が續いて紹介せられるのである。

著者錫田氏が信淵を説くに當つて示された周到なる用意のひとつに、信淵の呼吸した時代的背景の考察と

記述がある。徳川幕府による封建政治が如何にして頽廢するに至つたかの歴史的・思想的の研究、それが遂に經濟體制として支持し得なくなつてゆく經過、或は天保改革時代の世相の叙説等がこれである。

この時代的叙述は極めて興味あると共にまた暗示的である。人々は天保改革における水野越前守忠邦の諸統制政策を今日の時代の目を以て眺めることに並々ならぬ深い意味を見出し得るであらう。

藁にも説けるが如く、世に卓越して思索し思想したる人々は、常に問題をその核心において把握したものであつた。さればこそ彼等は時代の相對性を超脱して永遠に生命をもち、永く後世の人々に影響と示唆を與へ得るのである。

けれどもわれわれは同時にまた問題の他の半面の眞理を忘れてはならない。

人生と共に在るべき課題、人間生活と共に離れがたき根本命題或は國家の生命と共に考へられねばならぬ

問題は、右の如く恒常的なものであるには相違ないけれども、かくの如き基本命題が現實生活のうちに立ち現はれるのは、時代的相對性においてであることの認識である。さうして思索家の態度がこの時代的なるものに何等の關聯をもち得ず、それに何等の積極的な働きかけもなし得ぬものであるならば、かゝる思索も思想も單なる夢想に終り空想に走りさうして結局は空論空理の非難をうけねばならぬことに至るのである。

世に所謂學理と現實との乖離として取上げられる問題は即ちこれであり、科學の實踐性として論ぜられる課題も之に外ならぬ。學問はかくして二つの要諦をそのうちに具有するものでなければならぬ。ひとつは恒常的なものに對しての思索であり検討である。こゝでは主として事物の眞理性の一面が高調せられねばならぬ。ふたつは現實にして具體的なものに即しての關聯である。こゝでは主として事物の現實性が主要課題とならなければならぬ。さうでなければ學問は畢

竟一片の根なし草となり終るからである。

鴛田氏が信淵を説くに當つて、常に時代的史眼を忘れずこれを背景として敘述をすゝめられてゐることは右のやうな意味で最も妥當なる態度だといはなければならぬ。

殊に信淵は著者が筆をつくして説くやうに決して、單なる書齋人としての學者ではなかつた。所謂、閉戸先生 (Shuben = Hooker) とは凡そ正反對の學者であつた。「遊歴家としての信淵」の項はこれを説いて甚だ感銘的である。彼は幼少十三歳にして既に早く父に伴はれて蝦夷に遊んでより、十五歳江戸に遊學する迄に東日本の大部分を旅行した。かうして彼は八十二歳にして世を去るまでその生涯の大部を通じて遍歴に投じ、實地の踏査視察に没頭したのであつた。(一一九頁以下)

このことは信淵を考ふる上には、重大なる一事だと考へられる。彼の學問が一面において宏大無邊、且つ

絶世のものであると共にそれは決して空理空論に流れるものではなく、最もよく現實に即し時代性をゆたかに反映してゐる所以でもある。著者が信淵研究について、時代的觀察を重く取上げられた態度は、通常の意味以上にこの場合に殊更ふかい意味を感得させられる。

四

信淵は經濟學者としても不朽の名をもつてゐる。彼の經濟論の要諦は「經濟とは、國土を經營し、物産を開發し、部内を豊富にし、萬民を救済するの謂なり。故に國家の主たる者は、一日も怠ること能はざるの要務なり」(二一九頁)とのべ、或はまた「我家の經濟學は、天地の神意を奉行し、世界の蒼生を救済すべきの大道なるを以て、上天の明威を畏れて、恭儉の二徳を修め、奢侈放蕩の行を嚴く警むる」(三一九頁)といふに在る。

われわれは信淵の經濟思想のうちに、眞實の意味で

の政治經濟論を理解し、また統制經濟の思想を認め或は國土計畫の思案を窺ふのである。

今日、經濟學が再認識と自己反省とを要求せられてゐる根本的要請はどこに在るか。

それは學問としての經濟研究が主として現象そのものの分析に終始し、その現象を發現せしむべき人間共同生活の地盤から遊離してゐるといふところに在る。そのために、本來離れがたき國家・民族・政治・生活と經濟との關聯は無慘にも切斷せられ、經濟現象を全くそれ自體として取上げ、さうしてそれだけにせまらうとするの危険が生ずるのである。これは西洋經濟學のもたらしたひとつの影響であると共に、他面これをこのやうに取上げたわが經濟學者においても責任を分たねばならぬものである。

われわれは經濟學の研究においてリカードを取上げ、マシアルにつくこともよいであらう。だが同時に吾が足もとに、吾が國土のうちにかくも高遠なる經

濟論をもつた學者のあることを忘れてはならぬであらう。

しばらく私自身の場合を顧みても、われわれはその學生たりし時代に經濟學への手ほどきをうけたのであるが、その時何よりも先に與へられたものはリカアドオであり或はマーシアルであつた。わたくしはこれを不服といふのではない。たゞ同時にわれわれは信淵の經濟思想の如きについても十分な理解を與へらるべきではなかつたかと、今にして痛感するのである。

日本經濟學の建設への途は必ずしも一途には限らぬと思ふ。途はむしろ多岐であり多面的であるであらう。さうしてそのひとつの途に、先づわが國自身が今日までにもつたすぐれた經濟思想家の研究が存在するのである。今日までのところかゝる研究は、日本經濟學といふやうな廣さまでには未だ發展せず、むしろ部分的に或は經濟史家の間に、徳川時代の經濟及び經濟思想といふやうな特殊研究たるの形にとゞまつてゐるやうに思はれる。それは今日以後において一般的に取上げられて、日本經濟學の全構造を形造らねばならぬ役目をもつのである。

五

鴉田氏のこの著は、著者苦心の勞作である。そのことは著者の序文のうちに伺はれる。著者はこの勞作のために多年に渡り信淵の遺著、それに關する書籍、雜誌等を集めて研究をつゞけられた。それがためには「恰も古土器の破片を拾ひ集めて原形を成さしむるの思ひを以て、一小瑣事・斷筒・零片と雖も是を捨つることなく蒐集した。」とのべられてゐる。(序三頁)この苦心と努力に對しては敬服せねばならぬ。

わたくしのこの一文は世の常の書評と言ふべくあまりに自己自身を語りすぎたかも知れぬ。けれどもそのことは著者の勞作がわたくしに與へた深い感銘の證左である。わたくしがこの一文の表題を殊更に「讀後感」となした所以でもある。

本書の滋味あふるゝ内容に至つては、むしろ直接本書について之を擲すべきである。一片の書評の到抵之をよくするところでははい。さうして若し讀者にして、ひとたび本書を手にしてその一頁を開くや、讀者は忽ちそのうちへと自己を忘れ去るであらう。讀み了つて巻くとき讀者はすゝんで信淵その人の著作に直接

近づかうとする止みがたき要求を感じるであらう。その時、この著は十分にその使命を果すものと言ひ得るであらうし、著者の本懐も之にすぐるものはないであらう。(鶴田惠吉著「佐藤信淵」大觀堂發行、四圓五拾錢)。

本號執筆者紹介

北條時重氏	本校教授
上阪泰次氏	本校生徒主事
大泉行雄氏	本校教授